

## 木村素衛の表現愛

立命館大学大学院応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
床 枝 亮

人間は自己を表現せずにはいられぬ存在、自らの理想を追求しつつ自己を形成することを止めぬ存在である。我々が自己を形成するとき、そこに我々の生そのものであるところの文化が成立する。果てしなき文化の創造が我々の生を形づくって行く。なるほど確かに、それは常に我々人間の理想の実現であるに他ならなかった。しかし、我々にとって、文化の創造は果たしてそれだけのものに留まるであろうか。偉大なる文化の背景には常に偉大なる宗教があったことは我々の歴史が語っているところだが、文化と宗教には何らかの深いつながりがあるのではなからうか。もし両者の間に何らかのつながりがあるとすれば、それらは如何に連関するのであろうか。

本論稿の主たる目的は、木村の文化哲学を読み解きながら、文化の創造と宗教の連関を闡明することにある。あらゆる文化的な営みの中には宗教が息づいていなければならない。宗教は常に文化の根底にあって、それを支えるのでなければならぬ。木村はかくの如き信念を有っていた哲学者であった。木村が生み出した「表現愛」という概念は、まさしくかくの如き信念が最も端的な形で術語化せられたものであると言えるであろう。

木村の文化哲学を紐解くに当たって、我々はまず第一章に於て、文化とは何かという根本的な問いを立て、その本質及び成立過程を我々人間と自然との関わりの中から闡明しようと試みた。第二章では、第一章に於ける問題を展開し直し、身体を基点として成立する「表現的主体」 身体 「表現的環境」という三者構造 「表現的世界」、あるいは「歴史的世界」の構造それ自体の中で、文化の創造の過程を闡明しようとした。文化の創造の過程に於て、我々は如何にして宗教の世界へと導かれるのか。またその過程に於て、文化と宗教は如何にして統一されるのであろうか。第三章の課題はかくの如き問いを闡明することであった。そして、木村の「表現愛」がその内に含む弁証法的動的連関構造 エロス 懺悔 アガペ という三者構造 を闡明することによって、我々はこの問いに答えようと試みた。

文化の問題は即ち生の問題である。我々が如何に生きるかという問題である。それに対し、宗教の問題は信仰、懺悔、救済の問題であるが、それはやはり、我々が如何にして生きるかという問題と切り離せない。如何なる文化的な営みの中にも、そして如何なる文化の創造の内にも、大いなる生命に対する懺悔の心が生きて働いていなければならぬ。懺悔の心が生きて働くところにこそ真の宗教があり、真の文化の創造もあるのである。木村が言う「表現愛」とは、かくの如き懺悔の心が働くところにこそ成立する愛に他ならないのである。